

各関係機関団体の長
各病虫害防除員
農業資材販売等関係者 } 殿

福岡県病虫害防除所長

平成21年度病虫害発生予報第6号(9月)について

このことについて、病虫害発生予報第6号を発表したので送付します。

トビロウンカの発生に注意しましょう!

トビロウンカの発生ほ場率が高く、一部には要防除水準を超えているほ場も認められます。本種は、ほ場により発生状況に差が見られますので、必ずほ場毎の発生状況を確認し、防除の要否を判断してください。



トビロウンカ短翅型成虫

水稻、大豆のカメムシ類の防除を徹底しましょう!

本年は、平年・前年に比べ水稻の斑点米カメムシ類や大豆の吸実性カメムシ類の発生量は少ない状況です。
しかし、これらカメムシ類は出穂後は水稻へ、水稻収穫後は大豆ほ場へ移動し被害を及ぼしますので、十分な注意が必要です。
カメムシ類は広範囲に移動しますので、防除は広域一斉に実施しましょう。



ミナミアオカメムシ

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。

天気は平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の気温は平年並か高いでしょう。

降水量は少なく、日照時間は多いでしょう。

週別の気温は、1週目は高く、2週目は平年並か高いでしょう。3~4週目は高いでしょう。

要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	20	40	40
降水量	40	30	30
日照時間	30	30	40

(福岡管区气象台 21年8月28日発表抜粋)

予報第6号

向こう1か月の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)	
		平年比	平年比	前年比
普通期水稲	いもち病 紋枯病 トビイロウンカ 斑点米カメムシ類	やや少 少 やや多 やや少	やや少 少 やや多 やや少	やや少 やや少 多 やや少
大豆	ハスモンヨトウ 吸実性カメムシ類	並 少	並 やや少	少 やや少
かんきつ	黒点病 ミカンハダニ	やや少 やや多	やや少 やや多	並 やや多
かき	炭疽病 フジコナカイガラムシ	やや少 並	やや少 並	やや少 並
果樹共通	カメムシ類	少	-	少
茶	炭疽病 もち病 輪斑病 カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャノホソガ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ	並 並 少 やや少 多 並 並 並 多	やや少 並 少 並 やや多 並 やや多 多	並 少 少 やや多 やや多 並 やや多 多
イチゴ	炭疽病 ハダニ類	- -	やや少 やや多	並 やや多

注) 果樹カメムシの類の発生量(現況)は前年比

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の()書きは、(+)は発生を助長する要因、(-)は発生を抑制する要因、(±)は発生
の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【普通作物 - 水稲】

1 いもち病(穂いもち・葉いもち)

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、葉いもちの発生量

は平年よりやや少なかった(-)。

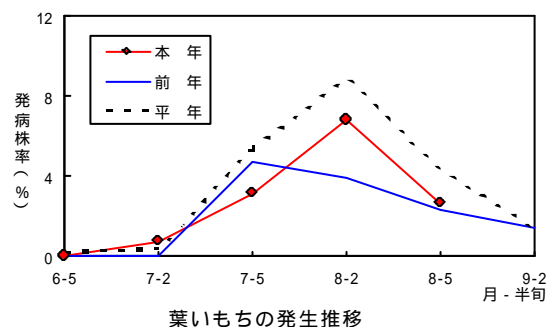
発病株率2.66%(平年4.31%、前年2.33%)

イ 葉いもちの病斑は停滞型が多かった

(-)。

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年

並か高いとされている(-)。



(3) 防除上の注意

- ア 穂いもちに対する薬剤防除(粉剤)は、出穂直前に散布する。なお、粒剤は剤型によって散布時期が異なるので注意する。
- イ ほ場によっては葉いもちがやや多発しているところもあることから、出穂期の天候には十分注意し、穂いもち防除の時期を失しないようにする。
- ウ 薬剤については「平成21年度普通作病害虫・雑草防除の手引き」を参照する(以下の病害虫についても同様)。

2 紋枯病

(1) 予報の内容

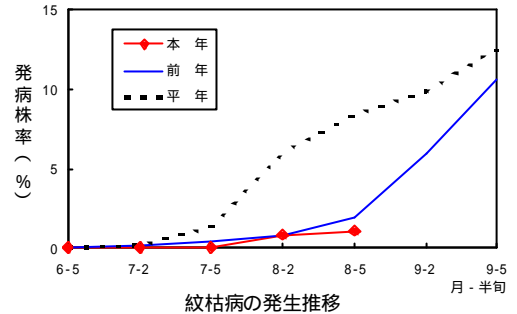
発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高いとされている(+)

(3) 防除上の注意

出穂期以降も、病斑の上位進展が認められる場合は、防除を行う。



3 トビイロウンカ

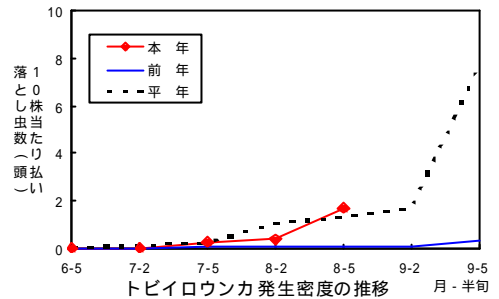
(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より多

(2) 予報の根拠

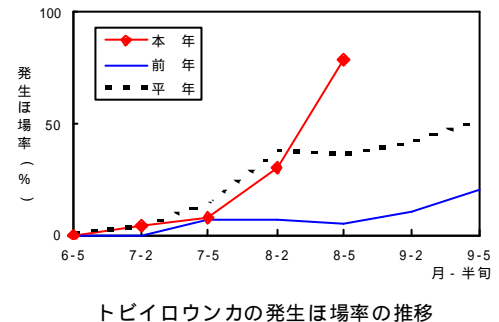
- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であったが(±)、発生ほ場率は高かった(+)
- イ 10株当たり払い落とし成幼虫数 1.5頭(平年1.3頭、前年0.03頭)
- ウ 発生ほ場率 78.7%(平年36.2%、前年5.3%)
- エ 成虫の短翅型率は83.7%と高い(+)

- ウ 一部には要防除水準を超えているほ場も認められている(+)
- エ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高いとされている(+)



(3) 防除上の注意

- ア 本種の短翅型は増殖率が高いので、密度が急激に増加し坪枯れを起こす可能性がある。
- イ 発生密度が要防除水準を超えた圃場では防除を実施する。
- ウ 要防除水準：9月上旬～中旬(老齢幼虫及び成虫の合計密度) 1株当たり 5頭



- エ 収穫期が近づいていることから、薬剤散布に際しては収穫前日数に注意する。
- オ 出穂後は薬剤が株元まで到達しにくくなるため、株元に確実に届くよう注意して散布する。
- カ 防除時期については、平成21年8月21日付「速報第6号」を参照する。

4 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査(出穂後水稻及び雑草地の片振り20回すくい取り)の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。
- イ 主要3種カメムシ類(ケハリカメシ、ホリカメシ、シラカメシ類)
 - 本田 0.4頭(平年 0.7頭、前年 0.7頭)
 - 雑草地 6.3頭(平年 13.9頭、前年 12.4頭)
- ウ カスミカメムシ類
 - 本田 0.8頭(平年 0.6頭、前年 0.6頭)
 - 雑草地 28.2頭(平年 26.0頭、前年 7.6頭)
- エ ミナミアオカメムシ
 - 本田 0.1頭(過去6か年平均 0.1頭、前年 0.2頭)
 - 雑草地 0.1頭(過去6か年平均 0.01頭、前年 0頭)

- イ 県下5地点の予察灯における8月1～5半旬の誘殺虫数は、平年より少なかった(-)。
ミナミアオカメムシ 12頭(過去6か年平均 23頭、前年 71頭)
アカスジカスミカメ 359頭(過去6か年平均 630.7頭、前年 303頭)
- ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並が高いとされている(+)

(3) 防除上の注意

- ア 防除適期は穂揃期及びその7～10日後である。
カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。
- イ 防除が実施されたほ場においても、カメムシ類の再飛来には十分注意する。
穂揃期散布後の見取り調査で、クモヘリカメムシとホソハリカメムシの合計虫数が、100株当たり2～4頭を超える場合は、その7～10日後に補正防除を行う。
- ウ ミナミアオカメムシに対しては、シラフルオフエン剤の防除効果が低いので、薬剤の選定に注意する。

【普通作物 - 大豆】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より少

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

25株当たり幼虫数 16.4頭
(平年 16.7頭、前年 31.9頭)

発生ほ場率 70.6%(平年 61.8%、前年 76.2%)

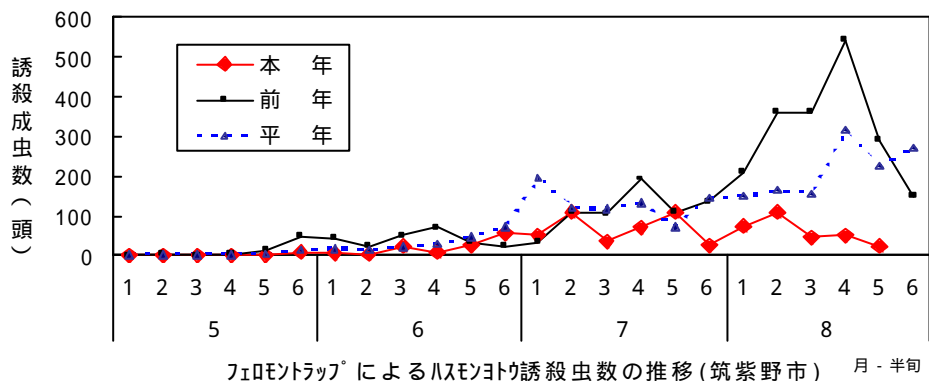
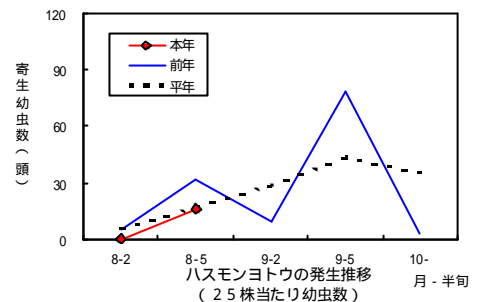
イ 筑紫野市の8月1～5半旬のフェロモントラップにおける誘殺虫数は239.9頭

(平年 1016.5頭、前年 1,765.0頭)と少なかった(-)。

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並が高く、降水量は少ないとされている(+)

(3) 防除上の注意

- ア 分散前の若齢幼虫が群棲している白変葉は、見つけ次第除去する。
- イ 薬剤散布は、効果が高い若齢幼虫期に実施する。
- ウ 防除適期はフェロモントラップの誘殺ピークから10日目頃であるが、地域によって発生に差があるため、若齢幼虫の食害で生じる白変葉の発生状況を必ず確認する。
- エ 近隣にフェロモントラップが設置されていない場合は、病害虫防除所ホームページのフェロモントラップの誘殺状況(筑紫野市、三橋市、行橋市)を参考にして防除時期を決める。



2 吸実性カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

主要3種カメムシ類(アオカメムシ、イモジカメムシ、ホソハリカメムシ)

25株当たり成幼虫数 0.06頭(平年 0.2頭、前年 0.5頭)

発生ほ場率 5.88%(平年 12.0%、前年 23.8%)

ミナミアオカメムシ

25株当たり成幼虫数 0頭(平年 0.04頭、前年 0.1頭)

発生ほ場率 0%(平年 1.7%、前年 4.8%)

イ 県下5地点の予察灯における8月1～5半旬のミナミアオカメムシの誘殺虫数は、12頭(過去6か年平均 23頭、前年 71頭)で、過去6か年平均より少なかった(-)。

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並が高いとされている(+)

(3) 防除上の注意

- ア 防除適期は開花期後30日前後である。多発生の場合は7～10日後にも防除を行う。
7月10～15日播種の大豆の開花期は、8月20～27日と予想されていることから、防除適期は9月19～27日である。また、8月2～5日播種の開花期は、9月上旬と予想されていることから、防除適期は10月上旬である。なお、生育状況については、地域やほ場毎に異なるので注意する。
- イ カメムシ類は広範囲に移動するので、広域一斉防除の効果が高い。
- ウ ミナミアオカメムシに対しては、シラフルオフェン剤の防除効果が低いので、薬剤の選定には注意する。

【普通作：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
水稲 縞葉枯病	多	多	やや多	<p>ヒメトビウンカは、収穫後のイネ刈株等で越冬するので、収穫後はすみやかに刈株をすき込む。</p>
コブノメイガ	少	少	少	

【果樹】

1 かんきつ黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

発病果率 1.5% (平年 4.6%、前年 2.4%)

発生ほ場率 36.4% (平年 47.7%、前年 62.5%)

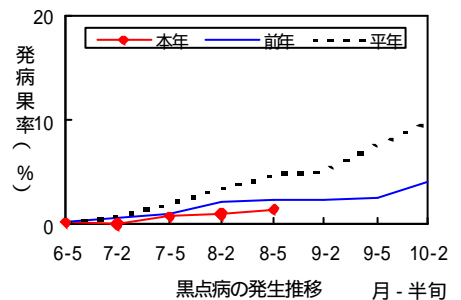
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は少ないとされている(-)。

(3) 防除上の注意

ア 伝染源である枯枝は除去・処分する。

イ 前回の防除から25日後又は積算降水量250mmになった時点を目安にし、降雨前の予防散布を徹底する。

ウ 早生種は収穫期に入るので、防除に当たっては農薬使用基準を確認し、薬剤の選定に注意する。



2 かんきつのミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)。

寄生葉率 27.1% (平年 14.4%、前年 17.6%)

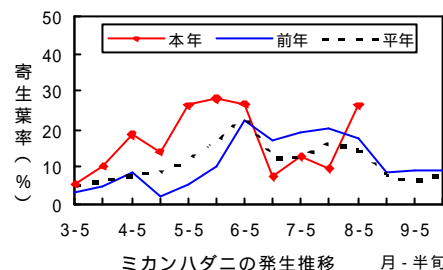
発生ほ場率 81.8% (平年 67.2%、前年 75.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は少ないとされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



3 かき炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

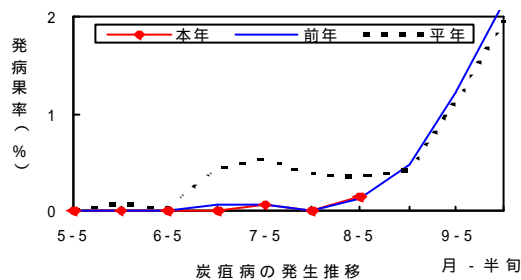
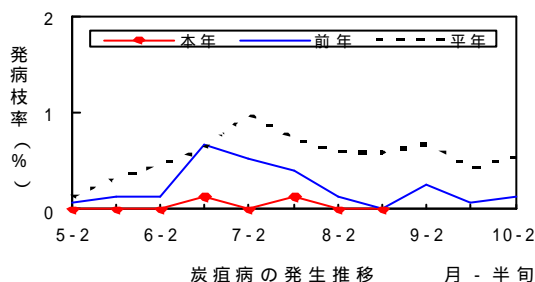
発病枝率 0% (平年 0.6%、前年 0%)

発生ほ場率 0% (平年 20.1%、前年 0%)

発病果率 0.2% (平年 0.3%、前年 0.1%)

発生ほ場率 15.4% (平年 24.9%、前年 13.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は少ないとされている(-)。



(3) 防除上の注意

ア 伝染源である罹病枝や罹病果は除去・処分する。

イ 台風等の強風雨が予想される場合や、罹病枝の多い園、本病に弱い品種(早秋)では、薬剤防除を徹底する。

ウ 樹冠内部の徒長枝に発病し易いので、樹冠内部に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

エ 早生種は収穫期に入るので、防除の際は農薬使用基準を確認し、薬剤の選定に注意する。

4 かきのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

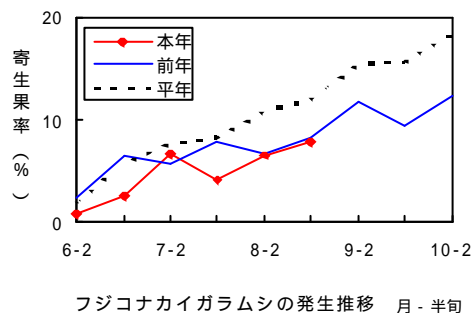
寄生果率 7.8% (平年 11.9%、前年 8.1%)

発生ほ場率 92.3% (平年 82.0%、前年 93.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は少ないとされている(+)

(3) 防除上の注意

ヘタのすき間や葉と重なった果実表面に、薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。



5 果樹共通のカメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：前年より少・前々年よりやや多

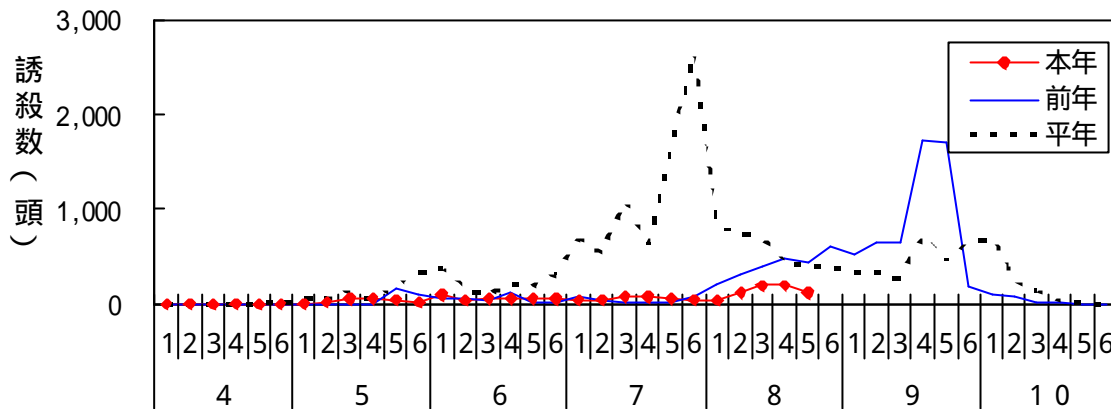
(2) 予報の根拠

ア 県下6か所の予察灯における8月1~5半旬の主要3種カメムシの平均誘殺数は680頭(前年1,804頭、前々年415頭)と前年より少なく、前々年よりやや多かった。

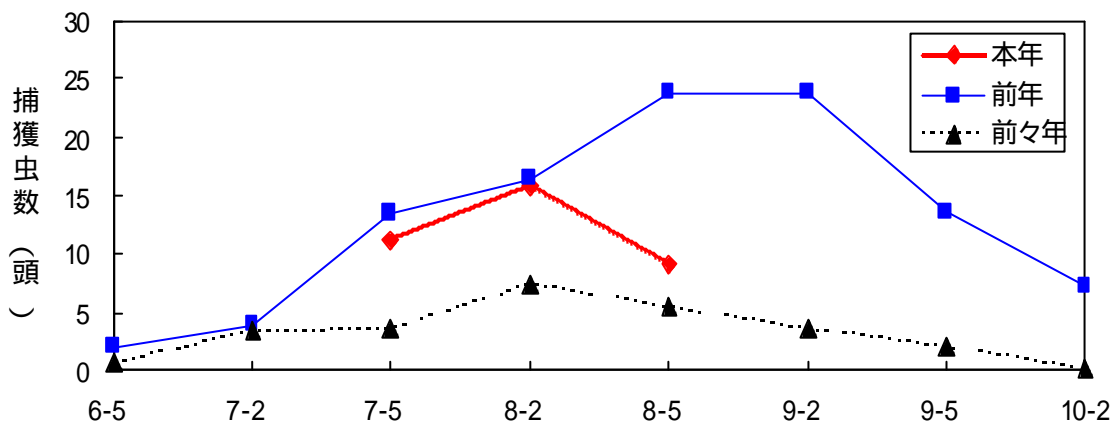
また、8月2半旬以降増加傾向にある。

イ 県下19か所における8月5半旬のヒノキ球果のビ・ティング調査では、主要3種(チャバ

ネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ)の寄生虫数は平均9.1頭(前年 23.8頭、前々年 5.4頭)で、前年よりは少なく、前々年より多かった。
 ウ 県下19か所における8月5半旬のヒノキ球果の口針鞘数調査では、口針鞘数は平均20.1本であり、カメムシ類がヒノキから離脱する目安とされる25本に近づいている。
 筑後支所管内では口針鞘数は平均28.0本で、離脱する目安とされる25本を超えており、既に一部の果樹園で飛来が見られている(+)。



予察灯における主要3種カメムシの誘殺数の推移
(県内6か所平均)



ヒノキのビーティングによる主要3種の捕獲虫数の推移(成幼虫) 月 半旬

(3) 防除上の注意

- ア 一部の果樹園で飛来が確認されているので、園内外を見回り、早期発見に努める。
- イ カメムシ類は広範囲に移動するため、防除は広域一斉が効果が高い。
- ウ 樹種によって使用可能な薬剤が異なるので、使用基準や使用回数等を遵守する。
- エ 最新の果樹カメムシ類の発生状況については、病害虫防除所ホームページを参照する。

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生現況	発生予報		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
かき うどんこ病	やや少	やや少	並	防除に当たっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。
ハマキムシ類	並	並	並	防除に当たっては、幼虫は葉が重なった部分や、ヘタと果実の間に多く潜んでいるため、薬液を高圧で十分量散布する。

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量： 平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病葉数 0.6葉(平年 0.6葉、前年 0.5葉)

発生ほ場率 44.4%(前年 28.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は少ないとされている(-)。

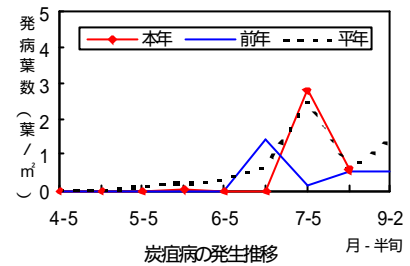
(3) 防除上の注意

ア 整枝後の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。

特に、秋芽に対する防除を徹底する。

イ 雨滴により胞子が飛散伝搬するので、降雨前の薬剤防除の効果が高い。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 もち病

(1) 予報の内容

発生量： 平年並、前年より少

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

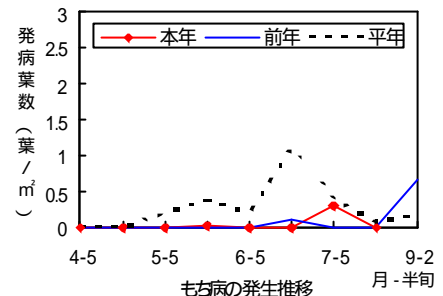
発病葉数 0葉(平年 0.09葉、前年 0葉)

発生ほ場率 0%(前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は少ないとされている(-)。

(3) 防除上の注意

降雨が多いと発病しやすくなるため、発生が心配される園では、萌芽から1葉期までに防除を行う。



3 輪斑病

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

発病葉数 0葉(平年 0.87葉、前年 0.03葉)

発生ほ場率 0%(前年 4.0%)

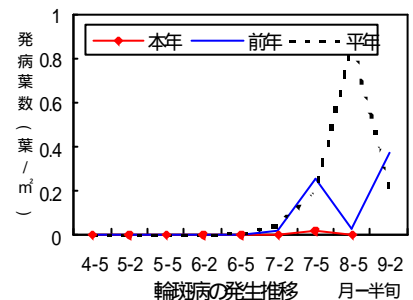
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は少ないとされている(-)。

(3) 防除上の注意

ア 病原菌は整枝後の葉や茎の傷口から侵入感染するため、夕立ち等の降雨後の発病状況に注意する。

イ 台風等の強い風雨の後では、感染が急速に拡大する恐れがあるので、降雨後速やかに(翌日までに)防除を行う。

ウ 本病の発生園では、新梢枯死症も発生し易いので注意する。



4 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量： 平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

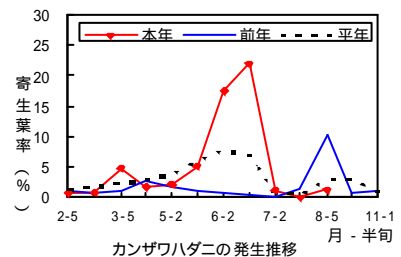
ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

寄生葉率 1.2%(平年 2.7%、前年 10.2%)

50葉当たり虫数 0.7頭(平年 6.5頭、前年 36.4頭)

発生ほ場率 33.3%(前年56.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は少ないとされている(+)



(3) 防除上の注意

- ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上の場合は防除を行う。
- イ 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

5 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月1半旬から8月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数は平年より少なかった(-)。

<調査地点>：筑後市 81頭(平年 212頭、前年 73頭)
 八女市 66頭(平年 321頭、前年 101頭)

イ 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)

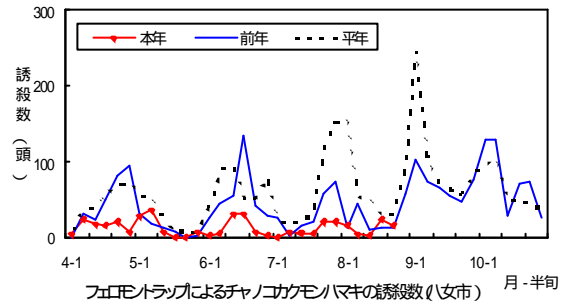
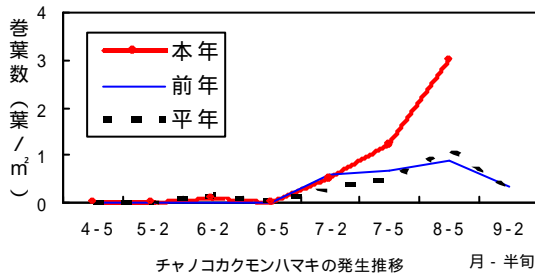
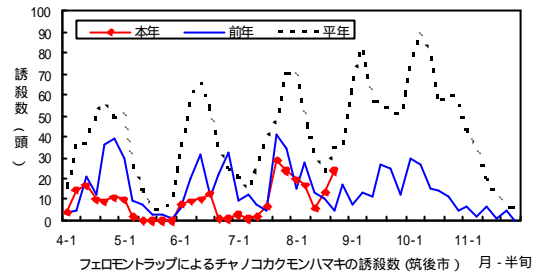
被害葉数 3.0葉(平年 1.1葉、前年 0.9葉)

発生ほ場率 33.3%(前年 28.0%)

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並が高く、降水量は少ないとされている(+)

(3) 防除上の注意

- ア 第3世代成虫の発蛾最盛期は9月上旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多い時から7日後を目安に防除を行う。
- イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら、直ちに防除を行う。



6 チャノホソガ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月1半旬から8月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数は平年より少なかった(-)。

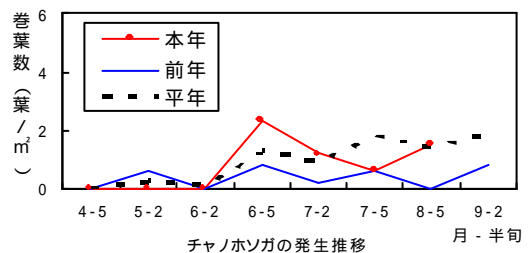
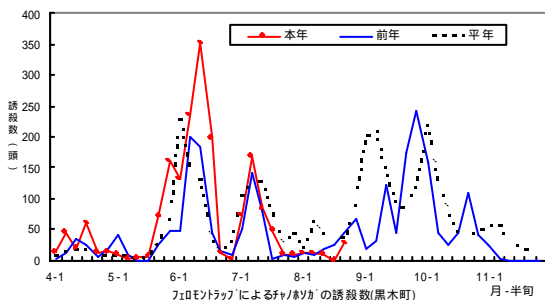
<調査地点>：黒木町 58頭(平年 200頭、前年 110頭)

イ 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

被害葉数 1.5葉(平年 1.4葉、前年 0葉)

発生ほ場率 27.8%(前年 0%)

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並が高く、降水量は少ないとされている(+)



(3) 防除上の注意

- ア 第4世代成虫の発蛾最盛期は9月上旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多い時から7日後を目安に防除を行う。
- イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。

7 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

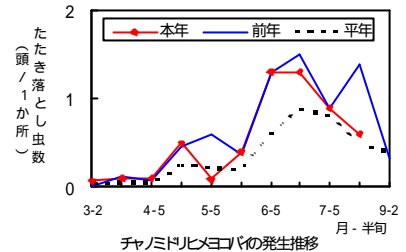
発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
たたき落とし虫数 0.6頭(平年 0.5頭、前年1.4頭)
発生ほ場率 50.0%(前年 80.0%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は少ないとされている(+)

(3) 防除上の注意

- ア たたき落とし(A4版白紙上)で、4頭以上発生している場合は防除を行う。
- イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。
- ウ 効果が高い薬剤が少ないので、多発する前に防除する。



8 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

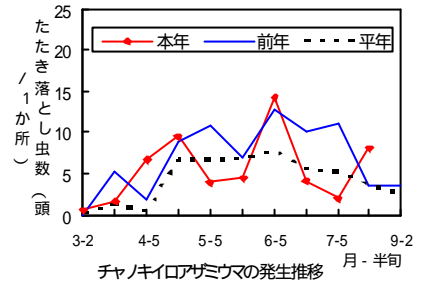
発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)
たたき落とし虫数 8.1頭(平年 3.8頭、前年3.8頭)
発生ほ場率 100%(前年 88.0%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は少ないとされている(+)

(3) 防除上の注意

- ア たたき落とし(A4版白紙上)で、10頭以上発生している場合は防除を行う。
- イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



【野菜】

1 イチゴの炭疽病

(1) 予報の内容

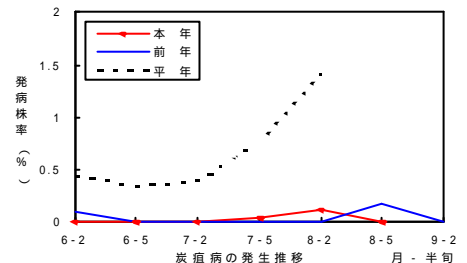
発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は前年並であった(±)。
発病株率 0%(前年 0.2%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は少ないとされている(-)

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 罹病苗や感染が疑わしい苗の周辺苗は、除去・処分する。
- イ 苗の選別には注意し、感染の可能性がある生育不良株は定植しない。
- ウ 定植後の枯死株は周囲の土ごと掘り取り、残渣を残さないようにして、ほ場外に持ち出し処分する。
- エ ビニルの被覆までは、ハウス内で新たに感染する恐れがあるので、定期的に防除を行う。
- オ ハウス内の排水を図り、多湿にならないようにする。



2 イチゴのハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

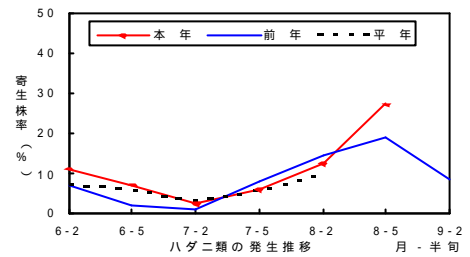
(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は前年よりやや多かった(+)
寄生葉率 27.4%(前年 19.2%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は少ないとされている(+)

(3) 防除上注意すべき事項

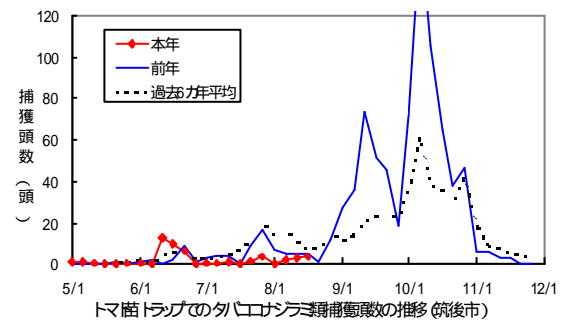
- ア 多発後は防除が困難になるので、初期防除を徹底する。
- イ 定植前に、苗のハダニの有無を確認し、ハウス内へ持ち込まない。
- ウ 摘葉した葉はハウス内に放置せず、ビニル袋等に入れ密封し、持ち出して処分する。

エ 天敵を利用する場合、育苗後半～定植前は、天敵類へ悪影響が強い有機リン系、カーバメイト系、合成ピレスロイド系、ピラゾール系の薬剤は使用しない。
 オ ハウス内や周辺の除草を徹底する。



【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
アスパラガス 斑点性病害	やや少	やや少	やや少	発生初期の薬剤防除を徹底する。 過繁茂にならないよう摘葉を行い、ハウス内の通風をよくする。
アザミウマ類	やや少	並	並	ハウス内や周辺の除草を徹底する。
チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ、 材外コガ)	並	並	並	早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。
野菜共通 ハスモンヨトウ	少	並	少	若齢幼虫は群生しているため、かすり状の葉を見つけ次第、除去・処分する。 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照のこと(以下の害虫のついても同様)。
オオタバコガ	並	並	並	薬剤防除は、孵化直後の幼虫を対象に実施する。
コナジラミ類	並	並	並	本虫はトマト黄化葉巻病やキュウリ退緑黄化病の媒介虫である。 防虫ネット(0.4mm目合い以下)を設置し、育苗ポットでの粒剤処理と定期的な薬剤散布等、体系的な防除を実施する。



農薬の適正使用、飛散防止対策の徹底を！

全ての農薬の残留基準が農作物毎に設定され、基準値を超えた食品（農産物）は販売が禁止されます。

農薬の使用に当たっては、ラベルを確認し農薬の使用基準を厳守するとともに、周辺に飛散（ドリフト）しないよう対策を講じて下さい。また、散布時は農薬の被ばく防止のため保護具を着用して下さい。

農薬の使用後は、防除履歴を正確に記帳し、使い終わった農薬の空容器は生活環境の保全や公衆衛生の点から適切に処分して下さい。

1 農薬適正使用の徹底

適用作物、使用量、濃度、使用時期、使用回数などのラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

他作物が隣接している場合は、なるべく双方に登録がある農薬を使用する。

2 飛散防止対策の徹底

風、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 防除履歴の記帳

薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳する。

5 空容器の処分

空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは法令で禁止されております。

病虫害防除所では、病虫害の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jpnp.ne.jp/fukuoka>
電子メール kfok0301@sp.jpnp.ne.jp

